

Hochschule Bremen

交換留学報告書

国際関係学部 国際言語文化学科 3年

ブレーメンで過ごした1年間は、今まで生きてきた中で一番印象的な時間だった。街、人々、生活様式、考え方、様々なことが日本と違った。

「これが普通」「これはおかしい」…日本の「普通」は理解されず、それをうまく伝えることも難しかった。その一方で、日本とは全く違う国の文化を知り、理解することは非常に面白かった。本レポートでは、このような私の異文化体験について報告する。

私が通っていた Hochschule Bremen には、日本語学科がある。その日本語学科のドイツ人学生とは、すぐに仲良くなることができた。

前学期は残念ながら希望していた授業を履修できなかったため、授業数が極端に少なくなってしまったのだが、日本語学科のドイツ人学生数人とタンデムの約束をし、授業が無い時間帯はタンデムをした。質問が無くても、他愛のない会話を楽しんだ。昔から人見知りだった私にとって、外国人と気兼ねなく会話できるようになったことは目覚ましい成長だといえる。

後期も、新たにタンデムパートナーを見つけドイツ語学習を継続した。秋は新入生が入ってくる。日本語学科へ入ってきたものの、今まで日本人と話したことのない学生も多く、彼らは緊張していた。私がドイツに来たばかりの時にそうされたように、私は緊張していたある学生に自分が使える全てのドイツ語で話しかけた。そうすると、最初はうつむきがちで言葉も発さなかった彼が、だんだん自ら話をしてくれるようになった。私が帰国する直前には、彼の家で大勢で餃子パーティーをするほどになったのだ。ドイツ語で一生懸命話しかけた結果、かけがえのない友人ができた。こんなに喜ばしいことがあるだろうか。

後期は、前期よりも多くの授業を履修することができた。

特にドイツ語 (B2) の授業では、頻繁に意見を求められた。その授業のテーマについて自分の意見を即興で述べるのは難しかったが、繰り返すうちにだんだん慣れていった。期末のプレゼンテーションでは、日本について紹介した。日本でもまともにプレゼンをしたことがなかった私にとってこのプレゼンはとても不安だったが、練習を重ねたおかげで落ち着いて話すことができ、プレゼン中に先生から投げかけられる質問にも、焦らず答えることができた。ドイツに来たばかりの頃は、予想外の事態や質問に臨機応変に対応できず焦ることが多かったが、この授業で様々な質問に焦らず答えられる力がついたように思う。ちなみにこの授業では、一番良い評価 (1.0) を受けることができた。

3ヶ月ほど続く夏休みには、Volkshochschule の語学講座に通った。

Hochschule で勉強している留学生とは違い、ほとんどがドイツで働くためにドイツ語を勉強している人々であるため、私のドイツ語学習に対する意識も上がった。

また、学生たちの国籍が様々で、バックグラウンドも様々であるため、Hochschule とはまた一味違う異文化交流ができた。特に、学生の中には英語が話せない人も多く、「自分だけ英語が話せない」という劣等感を抱くことなく常にドイツ語で会話できたことが非常に良い経験だったと感じる。

週末や長期休暇は、基本的にドイツ人学生と過ごしていた。私たち学生はゼメスターチケットという定期券のようなものを持っていたので、ブレーメンのあるニーダーザクセン州の中ならどこへでも電車で行けた。例えば、私はフォルクスワーゲンの本社がある Wolfsburg にゼメスターチケットで行った。本来ならどこへ行くにも交通費がかかるが、ニーダーザクセン州という広範囲を自由に行き来できるのは学生の特権であり、私も実際様々な場所に足を運ぶことができた。これは非常に良い体験だった。

日常生活では、日本との違いを様々な点で見つけることができた。特に印象的だったのは、スーパーやドラッグストアの店員である。日本では、レジでは立ったまま接客をするし、身だしなみや言葉遣いも細かく規定されている。だが、ドイツではそうではない。店員は座って時々水を飲みながらレジで接客をする。男女ともに、髪の毛、アクセサリなども人それぞれだ。しかし、私はドイツのレジの接客で嫌な思いをしたことがない。むしろ、笑顔で挨拶してくれる店員も多く、日本よりも気持ちの良い接客だった。ドイツのレジでの対応を体験してから、日本の働き方、職場の規定、また過度なおもてなし精神に疑問を持つようになった。

ドイツで1年間過ごしたことで、日本にいたら絶対に気づけなかったようなことを身をもって実感した。また、日本を客観的に見つめ直すことができた。今回の留学を実現してくださった大学、先生、また両親に感謝し、ドイツでの経験を無駄にせず今後の人生に大いに役立てていきたい。